

平成29年8月21日

2017年 第7回 東アジアインクルーシブシティネットワーク(EA-ICN)の構築に向けた ワークショップ

# 表現的実践を通じた「ケア観」の変遷にまつ わる研究

—大阪府堺市kokoimaでのアクションリサーチから—

大阪市立大学 都市研究プラザ 博士研究員  
アサダワタル

## 【目的】

本研究では、主に精神看護、障害者支援、認知症介護など、広く「ケア」と呼ばれる現場において展開される「表現活動」の意義や可能性、その実践を通じてケアする立場の人たち—看護師、生活支援員、介護士など—の間で紡がれてゆく新たな「ケア観」について、その変遷過程を記述することを目的とする。

そのうえで、具体的には大阪府堺市北区の浅香山病院における精神科病棟長期入院患者と看護師と写真家によるナラティブ写真展「ココ今ニティー写真展」の企画運営、その企画メンバーが中心となってNPO法人kokoimaとコミュニティカフェ「Cafeここいま」を設立した経緯に追うことで、精神看護というケアが表現活動を通じて地域社会に開かれていくプロセスと看護師たちのケアにまつわる考え方の変遷をアクションリサーチを通じて明らかにする。

## 【背景】

発表者はこの十数年来、知的障がいのある人と協働した音楽ワークショップに参加し、また精神障がいや知的障がいのある人たちの造形活動にまつわる研究をし、またあるときは精神科病棟に長期入院する患者の地域生活実現を目的としたNPOの立ち上げに関わっていた。文化芸術を専門とする立場として、看護や支援や介護といった領域とは何の縁もなかった筆者が、なぜケアの現場に関心を持ったのか。その端緒は障害のある人の作った作品に魅了されたことが大きいですが、しかし、実践と研究を続けていくうちにそれ以上に関心を持ったのは、実はケアの現場で働く人たちの自身の仕事に対する「真摯に揺らぐ姿勢」、といったものであった。

## 【背景】

ケアの現場においては、ケア“される”立場—病を抱える人、障害のある人、老いを抱える人など—は、それぞれのその弱さの特性において、「患者」となり(福祉サービスや施設の)「利用者」となる。しかし一方で、ケア“する”立場はこれらを自明のこととは言い切れないような気持ちの揺らぎに悩まされることも多いであろう。患者や利用者である前にもはや「“その人そのもの”と向き合っている」としか言い様がないメッセージを相手から受け取ってしまうこと。相手の人生の一端に生々しく触れた感触が消えることなく、職業的責任感のみでは整理できないような問いが胸中に渦巻いてしまうこと。そうしたとき、「ケア」を一体どこからどこまでの行為として捉え直せばよいのか。発表者はその答えを探るひとつのメガネとして、「表現」という営みは“使える”のではないか、と感じるに至った。

## 【本発表の位置づけ】

2016年秋から新たに研究テーマとして着手した現在の研究進捗は、事例現場に自ら集団の一員として参加し、その活動プロセスの観察・記録に徹している段階である。よって、本発表ではその記録の要点をまとめる事例報告の要素が強いが、今後の研究において先行研究(ケアの社会学、障害学、芸術批評、アートマネジメント等)との比較を通じた理論化を行ってゆく。

# 【事例の概要】

NPO法人kokoimaは、主に日常生活に手助けを必要とする精神障がい者に対して、地域のなかに居場所を提供し、同時に地域社会を精神障がい者にとってより住みやすい場所にしていくための事業を行う法人。主な事業として、堺市香ヶ丘商店街でコミュニティカフェ「cafeここいま」(2015年12月開設)を運営している。



特徴として、代表含め理事の内3名が看護師である点でがあげられる。代表は2015年3月まで現役の看護師だった小川貞子氏(左写真の左)。





Kokoima設立の背景には、浅香山病院で行われたある写真展の存在が欠かせない。浅香山病院は大阪府堺市北区にある総合病院で、とりわけ精神科医療体制が充実していることで知られる。ここでは、精神科病棟に長期入院する患者たちが被写体となる写真展が度々開催されてきた。

## ココ今ニティー 写真展 第2回

# 『スタイル ~STYLE~』

撮影：大西 雄夫（おおにし・のぶお）  
写真家。1988年生まれ。本橋成一氏に師事。フリーカメラマンとして、2001年より『精神科看護』誌のグラビア撮影を開始。『おばあちゃんは木になった』（ポプラ社）で第8回日本絵本賞受賞。ドキュメンタリー映画『水になった村』（ポレポレタイムス社）で第16回EARTH VISION 地球環境映像祭最優秀賞受賞。著書に、『津波の夜に3・11の記憶』（小学館）など。



誰にでも、皆それぞれ生き方に「スタイル~STYLE~」があります。

浅香山病院の風景には、既存のスタイルにとらわれず、自分らしく生きようと時に楽しく、時に切なく、時に遅く生きる人々の姿が映し出されています。

誰もが何かにとらわれる現代社会。写真たちが、あなたの心に一陣の清涼な風を送ります。

\*当日は、喫茶コーナーを設置します。

ゆっくりとご休憩しながらご観覧ください。

- 開催場所：堺市堺区今池町3-3-16 浅香山病院 A館9階ホール内
- 開催日時：平成25年 **11月16日(土)** **17日(日)** **18日(月)**  
10:00~16:00 (初日のみ13:00開始)
- 観覧・ドリンク：無料
- 主催/問い合わせ先：浅香山病院看護部/開催事務局 tel. 072-229-4882 (代)





ココ今ニディー写真展  
10 浅香山病院  
(撮影: 大西裕夫)





きっかけは、2012年に写真家の大西暢夫が『精神科看護』という雑誌のグラビア連載の撮影のために浅香山病院に訪れたこと。患者個々人と撮影を通じて関係性を築きあげていくなかで、連載では掲載しきれないほどたくさんの魅力的な写真が誕生し、患者たちや看護師たちからも「写真展をしてもっと多くの方々に観てもらおう」という意見が自然に生まれたという。これが「ココ今ニティー写真展」のはじまり。



まずは浅香山病院の院内でスタートしたこの取り組みは、姉妹系列の茨木病院や森ノ宮医療大学のオープンキャンパスでの開催へと広がり、2015年秋にはグランキューブ大阪で開催された日本看護学会内・精神看護学術集会(日本看護協会)でも展示されるなど、活動に広がりを見せている。







このような実践を通じて看護師たちは、病院という制度のなかで行ってきた自身たちの「ケア」の在り方について、様々な揺らぎを伴うことになる。院外との個別の関係性が新たに生まれた患者たちの声を聞く中で、写真展をきっかけにしながら退院と地域生活への移行を果すためのアクションを行うには、「病院発」の試みだけでは限界があることを知ってゆく。

そんななかから写真展の中心人物であった当時 看護部長 兼 副院長の小川貞子が自主退職をし、写真展に関わったメンバーたちが地域で過ごせるような居場所づくりの事業に着手。2015年4月以降、小川の意思に賛同する数名の看護師と筆者ら文化関係者、まちづくり関係者、精神看護の研究者などが集結。法人設立への動きへと繋がった。そして2015年12月に、浅香山病院から徒歩10分程の堺市北区香ヶ丘町の商店街の空き店舗を活用したコミュニティカフェ「こいま」をオープンすることになる。

# 【ココ今ニティ一写真展の要点】

①患者さんたちが被写体であるに留まらず、展示会場において個々人自らが写真の横に座り、撮影時の思いや半生、そして夢について語り出す、「ナラティブ（語り）」な実践であるという点。

②この展覧会の企画自体に患者さんたちが主体的に関わり名刺まで制作し営業している、つまり「地域参加」という点。

③これらの点を通じて、看護師と患者と写真家という関係性が、この写真展を通じて同じ志 — 写真をもっと多くの人に観てもらいたい、院内に留まらないあり方で様々な人と出会いたい — のもとで「メンバー」として編み直されるという点。

# 【運営メンバーの言葉】

このような取り組みがなぜ実現できるのか。課題だってたくさんあるのではないか。例えばメンバーのプライバシーの問題はどのようなのか。発表者がはじめて2014年の茨木病院での展示を観に行った際はいろいろな問いが浮かび、小川氏にインタビューを試みた。

しかし写真展運営の中心を担う看護師たちの答えは極めてシンプルなものだった。要は写真を外に出す際に患者本人たちが実名で出してもいいかどうかということを含めて同意をもらうというプロセスさえきちんと行うこと。そして、公開の範囲として「院内だけならいい」「院外の展覧会でもOK」といったこともあわせて同意を取り、その同意が取れた方だけが出展する、というだけの話だと、いう回答。逆に言えばなぜこういったことがこれまで精神科病棟ではタブーとされてきたのかについての問題意識も感じた。

しかし、患者さんが運営「メンバー」として、写真展の企画運営そのものを担ってゆく状況づくりはどのように行ったのか。この点に関しては、事の発端はどちらかと言うと看護師たちから「仕掛けた」部分があることは、看護師たちに自覚があるようだ。

しかし、それは飽くまで本当に事の発端。企画を重ねていくなかで、賛同した患者さんたちが自分たちの名刺を作り、「なんでこんなことをしているか」ということを観客に自分の言葉で語りたいという気持ちで、患者さんの側からふつつつと沸いてきた、とのことだ。だからこそ単なる写真展ではなく「ナラティブ写真展」としての独創的な表現的場づくりとなっていることが推測される。

その証拠にメンバーのうち益田敏子さんと治村正信さんの写真展を重ねてきた感想（2015年6月時の手書き感想用紙より原文のまま書き起し。但し個人名の箇所は〇〇として表記）を紹介しておきたい。



看護学生さんと話す機会を得ました  
説明をしながら写真も見てもらいました  
奥様でこの写真は覚えていますよとやさしく云って下さった方もいらっしゃいました  
よく写真が撮れているねと写真をほめて下さった方もいました  
全体的には好評だったように思いました  
ご来場のみなさま方も今回は多かったように思いました  
精神科のイメージが変わってくれたらいいなと思いました

(益田敏子さんの感想／2015年6月時の手書き感想用紙より原文のまま書き起し。)





写真展にこられた方が、写真や詩に見つめられ、うれしかったです。  
僕の写真はいちばんエレベーターの前だったので、少しさみしかったです。  
だけど見に来てくれた方々に名刺交換をしたりしてほんとうにたのしかったです。  
アイスミルクティーや、アイスコーヒーもでてよかったです。  
昔おられた〇〇さんや〇〇さんにも出会えてよかったです。このココ今ニティ写真展が日本中に届くとよいと思います！！

(治村正信さんの感想／2015年6月時の手書き感想用紙より原文のまま書き起し。但し個人名の箇所は〇〇として表記)

一方、その大元のきっかけを作った写真家 大西氏はどのような思いを持っているのか。同じく2014年に茨城病院での展示時にインタビュー。

写真が何かの効果になったかどうかというのはあくまで後付けではあるけど、でも明らかに患者さんたちが一枚の写真で相当変わった感じがしますね。いまみんな僕の名前を呼んでくれていますよね。患者さんたちが覚えてくれて名前呼び合うまでってなかなか時間がかかるんですよ。それはまあ病院に限らずですけど、そういう関係にまで行き、被写体とカメラマンなんですけどどっかでその域を超えたところで、“またご飯たべにきたで”ってね、そういう呼吸を受け入れてくれている感じがします。

また、写真展を通じてこうやって外部と接触して名刺つくって営業に行ったりね、そういうアクションっていうのが、僕たちの生活とほとんど同じようになってきたってことも大きな変化のひとつだと思う。この取り組みが、もう一息外にでるべき。この写真の存在が珍しくない時代を僕も病院側も求めているはず。僕らは忘れてるんです。彼らの存在をほんとうに忘れてるので、もっと地域に出て行く意味があるだろうと模索しています。

【写真展から地域へ】

## この段階での小川氏ら写真展中心メンバーである看護師たちの思い

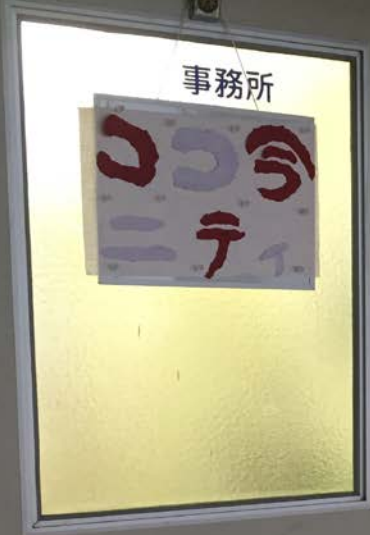
■写真展はあくまできっかけ、ようやく「治療」や「看護」の対象としてだけではなく、患者さんが望んでいる社会とのつながりや普通に生活をするということの具体的な実現にどう繋げて行くのか……。→イベントから日常へ。

■それで、小川氏は「中の立場にいては、自由に身動きがとれない」と考え、早期退職。病院の一階にある長年使われてなかった12畳ほどの部屋を、「病院と地域を繋ぐコミュニティサロン」として再活用し、その運営を患者と小川氏ら看護師たち、つまり写真展の運営メンバー「ココ今ニティメンバーズ」が共同で担うことに。でも、実際ここでどういったことをやっていけば、いい形で外の人とも日常的に繋がっていけるのかはまだ検討がつかず悩む。

発表者も、この時期からNPO立ち上げ～地域でのカフェ開設という一連のプロジェクトのメンバーとして本格的に参画。アクションリサーチを開始する。







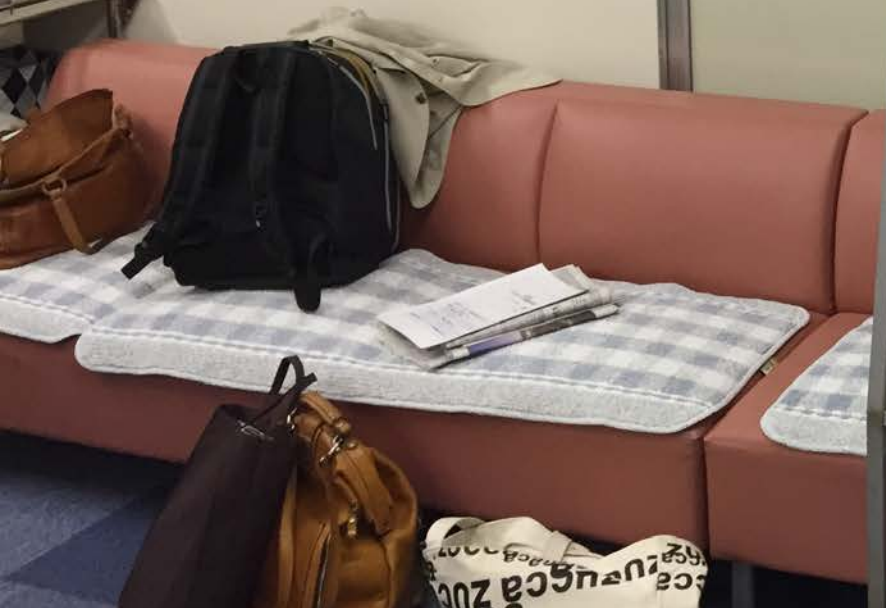


和字展覧会のお知らせ  
和字展覧会のお知らせ  
和字展覧会のお知らせ  
和字展覧会のお知らせ  
和字展覧会のお知らせ









初めてここに来たときに、小川氏が発表者に伝えたのは以下のような内容。

この場所にときどきは出入りするか、できるだけ電話してほしいんです。そうしていただくと、メンバーさんが“はい、ココ今ニティー事務所です！”って電話をとられるでしょう。そして接待したり、伝言したりされるじゃないですか。そのことでメンバーさんに“役割”ができる。そして地域社会への関心が人とのコミュニケーションを介して高まっていくきっかけになるんです。

この発言から伺えたのは、メンバーたちが写真展開催という「イベント＝非日常」の活動のみならず、「日常」的にも社会の一員としての意識を持ち続けられるような機能が、このサロンには込められている点だ。かつ、個々のメンバーと写真展を通じてつながりができた外部の人たちにとっても、これまでメンバーに会いに行く際は病棟へ「見舞い」のような形で訪問せざるをえなかったところが、このサロンができたことで、より気軽に立ち寄れるようになったという利点もある。

そういった外部との糊しろがまず院内でできたことによって、発表者も会議に出席するのみならず、音楽などの表現を通じたコミュニケーションワークショップを開催する運びとなった。





11/10  
1. 音楽(作曲)確認  
2. 音楽 印刷・提案  
3. 印刷→紙芝居  
4. 紙芝居→紙芝居  
5. ...  
6. ...  
7. ...  
8. ...  
9. ...  
10. ...  
11. ...  
12. ...  
13. ...  
14. ...  
15. ...  
16. ...  
17. ...  
18. ...  
19. ...  
20. ...  
21. ...  
22. ...  
23. ...  
24. ...  
25. ...  
26. ...  
27. ...  
28. ...  
29. ...  
30. ...  
31. ...  
32. ...  
33. ...  
34. ...  
35. ...  
36. ...  
37. ...  
38. ...  
39. ...  
40. ...  
41. ...  
42. ...  
43. ...  
44. ...  
45. ...  
46. ...  
47. ...  
48. ...  
49. ...  
50. ...  
51. ...  
52. ...  
53. ...  
54. ...  
55. ...  
56. ...  
57. ...  
58. ...  
59. ...  
60. ...  
61. ...  
62. ...  
63. ...  
64. ...  
65. ...  
66. ...  
67. ...  
68. ...  
69. ...  
70. ...  
71. ...  
72. ...  
73. ...  
74. ...  
75. ...  
76. ...  
77. ...  
78. ...  
79. ...  
80. ...  
81. ...  
82. ...  
83. ...  
84. ...  
85. ...  
86. ...  
87. ...  
88. ...  
89. ...  
90. ...  
91. ...  
92. ...  
93. ...  
94. ...  
95. ...  
96. ...  
97. ...  
98. ...  
99. ...  
100. ...













かしむかし、あるところに、まずしい二人の子どもがいました。  
兄さんの名前はチルチル、妹の名前はミチルと言いました。ク  
スマスの前の夜の事です。二人のへやに、魔法使いのおばあ  
がやってきて言いました。「わたしの孫が、今、病気でな。し  
の青い鳥を見つければ病気はなおるんじや。どうか二人で、  
を見つけてきておくれ」「うん、わかった」チルチルとミ  
カゴを持って、青い鳥を探しに旅に出ました。チルチル  
がはじめに行った国は、『思い出の国』でした。二人は  
死んだはずのおじいさんとおばあさんに出会いました。  
でも、みんなが心の中で思い出してくれたなら、いつで  
できるんだよ」おじいさんは、そう言いました。そ  
とミチルに、この国に青い鳥がいることを教えてく  
ころが、『思い出の国』を出たとたん、青い鳥は黒  
しまいました。チルチルとミチルは、つぎに病気  
なものがいっぱいある『夜のごてん』に行きまし  
青い鳥はいました。でも、つかまえて『夜のご  
青い鳥はみんな死んでしまいました。それか  
のごてん』や、これから生まれてくる赤ちゃん  
行きました。どこにも青い鳥はいましたが、  
みんなだめになってしまうのです。「さあ、  
スマスですよ」お母さんのよぶ声が聞こ  
と、二人は自分たちの部屋のベッドの中に  
旅は、終わったのです。チルチルとミ  
かまえることが出来ませんでした。で  
と鳥カゴを見ると、中に青い羽根  
「そうか、ぼくたちの飼っ  
だ。しあわせの青い鳥は  
互いに顔を見合わせて、ニ  
は二人に、しあわせはす  
のだと教えてくれたので

妹が画会に1年ぶり  
に来た事です。  
二人の兄弟  
山支岸県から

日近あった嬉しい事

それは9月2日から外出できる様になった事です

9月3日今日まで



# ココ今サロンができてからの、写真展開催に向けた患者さんと看護師さんのやりとり

差出人: 小川貞子 teiko.o2296@gmail.com 🇯🇵

件名: 小川からのお願いです。

日付: 2015年5月20日 14:58

宛先: アサダワタルさま wataruasada@kotoami.org, 下田健二さま kenshimo080814@i.softbank.jp, 北村すみえ s-smile-2912@softbank.ne.jp, 平野謙一さま hirano@kchr.jp, 廣田安希子さん wakuwaku-a@docomo.ne.jp, 来栖清美さま curusu@n.vodafone.ne.jp, 松本憲之さま norio-ns-0420@i.softbank.jp, 林啓次さま hayashi@kch.biglobe.ne.jp, 石黒一郎さま grosan@city.sakai.lg.jp, 西野貴彦さま muito\_a\_vontade@ares.eonet.ne.jp

ココ今ハウス構想研究会のみなさまへ。

先週末からの物品搬入と清掃もほぼほぼ終了しました！

そこで、いよいよボランティアとしての皆様のご活躍を期待いたします。

072-229-9136 「ココ今ニティ」の外線番号です。

外線電話の設置とインターネットPCは、もったいない？意識を打破してゲットできた大切な成果物です。ぜひぜひ、外につながるシステムを機能させたいのです。(ネットは、まだランが引けていません)

お電話してくださ～い。

例文その1、「写真展の日時をお聞きしたいのですが・・・」

例文その2、「当日ボランティアで参加したいのですが・・・」

例文その3、「小川さんいますか？」

などなど・・・

できるだけ、メンバーの人とやり取りしてください！！

メンバーが電話に出るかどうかは「運」にもよりますが、確立としては15時から17時あたりがいい時間です。

当面の目標は、5月29日、30日の写真展成功です。

18日から、メンバーたちは各部署へのポスター掲示依頼行動を開始しています。

なにとぞ、よろしく願います。

\*\*\*\*\*

小川貞子 teiko.o2296@gmail.com

廣田 安希子

差出人: 大山 英文  
送信日時: 平成27/05/23 (土) 09:22  
宛先: 永江 小百合; 太田 夕紀恵; 大山 英文; 廣田 安希子; 島津 聖子; 北村 素美恵 その他  
件名:  
患者:

宣伝活動、写真選定、なんかすごい活気がありますね。  
事務所が出来て熱や力が集中しやすくなった感じがします。

昨日、田さん、岡さん、滝谷さんでA館制覇していただきました。  
本日、田さんに感想を聞くと「みんな笑顔で迎えてくれて、いつやるの? って聞いてくれて、待ち望んで  
いるって感じた。」と言ってくれました。  
岡さんも「みんな笑顔で対応してくれた」と喜んでいました。

野さんですが、先週あたりから気分変動があり、本日も朝から他患者へ大声へを上げています。「写真展  
が続いてしんどいねん」と本人も話しており「週末は休んで、本番に向けて体調を整えましょう」と提案し  
ています。メンバーの皆様も本人を見かけたら休息の声かけをお願いします。

A7・大山

廣田 安希子

差出人: 永江 小百合  
送信日時: 平成27/05/23 (土) 09:38  
宛先: 西野 貴彦; 太田 夕紀恵; 大山 英文; 廣田 安希子; 島津 聖子; 北村 素美恵 その他多数  
件名: Re:  
患者:

おはようございます。  
滝谷さん議事録ありがとうございます。  
西野さん写真選びありがとうございます。  
ポスター配布もメンバーで頑張っていますね。お疲れ様です。

\* iログループの様子 ( 村さん、 村さん、永江)

5/18 13時～医事2課、東5、4、3、OP、HCU、内視鏡、X-P室へポスターもって行きました。

1、2カ所は緊張していましたが廣田さんが作ってくれた心得を活用して説明出来ました。

東病棟へ行く、エレベーターを待っている間、 村さんに余裕が出来てきたのか、「みんな笑顔がないよ！」という、 村さんが、にっこり笑顔練習して、2回目の笑顔がとても良くて、「それいいね！」と自然にSSTが出来ていました。 iロさんも 村さんにつられて笑顔を作っていました。そして一緒に行った私も笑顔！でと次の病棟に向かいました。救急外来以外は行くことが出来ました。帰り、地下道では「病院広くて遠いな」と、少しお疲れ気味でした。役割を果たしてココ今事務所でお茶飲んでほっとしていました。

5/22 17時ココ今事務所に大西さんからTELがかかって来ました。

村さんが電話を受けてくれました。大西さんは忙しく活動しているとおっしゃっていました。

村さんもしっかり応答していました。

事務所にいる間でも自分達の役割を果たしているなと感じました。

以上報告でした。

メンバー: 永江

各位 殿

2015年5月28日

ココ今メンバーズ

ココ今ニティー写真展2015 特別企画  
**ココ今座談会**

まもなく梅雨が訪れる季節になりました。皆様におきましては、ご健勝のことと存じます。

いつも、励ましをいただきありがとうございます。

今年度はまたバージョンアップし、ココ今ニティー写真展2015 in 浅香山病院が開催できることになりました。

今回は特別企画としまして、メンバーによる座談会を開きたいと思いをします。

「私たちはココ今活動の中で、  
どう感じどう変化してきたのか。

そして、**どうしてこの活動を続けるのか**」  
をテーマに語り合います。皆様方と語り合いながら、思いを深めたいと思いをします。ぜひぜひ、ご参加ください。メンバー一同楽しみにお待ちしております。お仕事のお疲れを吹き飛ばしましょう。

記

日時 2015年5月29日(金) 19:00~20:00

場所 ココ今ニティー

軽食を用意しますので、お電話でお申込みください

連絡先 内線:4253 072-229-9136



集まった看護師メンバーは25名ほど。

その多くは写真展や発表者の表現ワークショップなどの取り組みを好意的に受け止め、自ら運営メンバーとして奔走する人もいるが、こういった取り組みがあることで患者の気分の変動が逆に目についたり、買物や広報などで患者が地域へと出て行くことのサポートについての難しさを感じていたり、課題も出た。

つまり「治療」という観点からしか、精神病院での看護師と患者の関係がなかったところに、新たな活動が挟まることで、いい意味でも悪い意味でも新しい関係性が生まれていることに戸惑いを感じている。

一人の人として社会と繋がりながら生きていく一見当たり前のことと、病院での閉鎖的にならざるをえない「治療体制」との両立はやはり難しいのか。

確かにココ今サロンが出来たことは新しい取り組みとして象徴的。院内でありながらも、「病棟＝治療の場」ではなく、メンバーにとって「別の居場所」である場所の持つ意味。しかしその一方で、ではこの場自体を「地域」と言えるのかということ、それは難しいというのが小川氏たちと共有してきた意見。物理的にも院内であることや、またあくまで「ココ今ニティー写真展のメンバーの事務所」という体裁で開かれているために、写真展を通じて知り合った方以外との偶然の出会いに恵まれる機会も決して多くはない。

あらゆる前提や文脈を超えたところで、地域でのより「生身」の出会いを生み出してゆくためには、どうすればいいのか。このようなプロセスを経て、いよいよ本格的に地域のなかで物件を借りて場づくりを行うという具体的なアクションへと繋がっていく。

## では、どんな「場」を求める？

プロジェクトチームの初期の議論では、患者メンバーが地域で「住む」ことを直接的に実現する場づくりを想定していた。つまり「家」である。2015年春～夏にかけての当時の会議資料には「ココ今ハウス構想」と題されていて、それがグループホームのような形をとるのか、シェアハウスというニュアンスが近いのか、あるいはメンバー各々が個別の部屋を借りつつもみんなが集えるスペースを別途借りるか、などが議論されてきた。

形態の違いこそあれ、ポイントとして浮かび上がってきたのは住まいでありながらも集える場があり、かつその場が地域に開かれている（あるいは地域に働きかける）という点。くわえて、小川氏たち看護師から度々あがってきた意見は「“施設”ではない」という点だった。メンバーたちがその場で何かしらのアクションを起こすことで、地域住民も集まりたくなるような場。かつ、あくまで「普通(?)の家」であり「施設」ではない場。

丸順不動産株式会社（大阪府）

## まちの財産として長屋等を再生 “Be Local Partners”を結成

日本で初めて「区画整理」によるまちづくりが行われ、戦前からベッドタウンとして発展してきた大阪・阿倍野エリア。その阿倍野で90年余りにわたり地場密着で不動産業を営み、地場不動産業者ならではの視点で阿倍野エリアのタウンマネジメントに取り組んでいるのが、丸順不動産（株）（大阪市阿倍野区、代表取締役：小山隆輝氏、大阪府宅建協会所属）です。

**阿倍野という“畑”を何とかして耕していく**

同社が、阿倍野エリアのまちおこしに注目し始めたのは、バブル崩壊後。地場不動産会社の独壇場だった賃貸仲介や駐車場管理に大手不動産会社が参入、資本力とブランド力でシェアを拡大してきたことに対する危機感と、空き家率の増加、人口の減少、住民の高齢化、商店街の衰退など、活気を失いつつあった阿倍野エリアを何とかしたいという思いからでした。「地域が衰退すれば、不動産会社の仕事も衰退する。地域に根差して商売しているわれわれが生き残るためには、阿倍野という“畑”を何とかして耕していかなければならない」（小山社長）

そこで、小山社長は、まちにある財産（ストック）に新たな価値を生み出すことで、まちの価値を高めていこうと考えました。そして「まちの財産」として真っ先に目を付けたのが、前記した区画整理により大量に供給された「長屋」です。長屋の多くは、使い道がないまま放置されるものも多かったのですが、その歴史的価値を評価し、何とか長屋を維持していきたいというオーナーの声も増えていました。そこで同社がプロデューサーとなり、こうした長屋や築古の住宅・ビル、店舗

をリノベーションで再生し、まちおこしのアンテナ物件として、個性的なテナントを誘致しました。

### テナント入居後は伴走者として運営を見守る

オーナーとテナントとの間に立ち、対等な関係を構築。テナント入居希望者とは、入居前に必ず一緒にまちを歩き、まちの人達やオーナーのまちおこしに対する想いを伝えます。経営が行き詰らないよう契約条件等もオーナーと調整し、入居後は伴走者として、その運営を見守っています。

同社は、このタウンマネジメント事業を、地域住民等を巻き込んだ大きなまちおこし活動へと昇華させようとしています。合言葉は“Be Local”。建築士や都市計画コンサルタントなどの専門家集団が集まり、“Be Local Partners”を結成、buy-local（地域商業を守り育てる）活動、専門知識を生かしたリノベーションや新しい不動産活用の提案を行っています。

「この業界の次代を担う若者たちがまちおこし活動で食べていけるよう、不動産会社が地域から尊敬される存在にしていきたい。幸い、全国各地の地場不動産会社の中にも、同じような考えを持つ人たちが増えてきました。こうした人たちと連携し、地場不動産業者によるまちおこし活動を活性化していきたいと思っています」（同）



小山社長



まちおこしのアンテナ物件として初めて再生に関わった登録有形文化財「寺西家阿倍野長屋」。和・洋・中の飲食店舗を誘致。長屋の雰囲気を変えないよう内装を改修、同社が管理。



再生コストを抑えて築古ビルを改修。開業資金の乏しい女性企業家にターゲットを絞って募集、アトリエや雑貨店など個性的なテナントを集め、わずか3ヵ月で全8店舗が埋まる（下はテナント内部）。

ハトマークグループ 10年後の理想の姿

私たち、ハトマークグループは、みんなを笑顔にするために、地域に寄り添い、生活サポートのパートナーになることを目指します。

## 「地域」はどこにある？「まちの不動産屋さん」との対話

とりわけどの地域をターゲットにするかという課題には一際骨を折った。精神障がい者が暮らしやすい土壌があり、かつ理想の物件を見つけやすい地域とは・・・？ 大阪市阿倍野区昭和町にて、「まちの不動産屋さん」として活動する丸順不動産三代目社長の小山隆輝さんに相談することに。小山さんは、昭和町エリアの長屋や古い建物のリノベーション・利活用を通じて、デベロッパーが行う再開発とは別の方法で、地域に根ざしたまちづくりを積極的に行ってきた方である。一方で彼は、知的障がい者向け生活訓練所として社会福祉法人への物件の賃与や、多機能型デイサービスを営みたいというNPO法人の誘致も手掛けられてきた。

「“地域”で活動をするのであれば、物件よりも前に重要なのは、その地域の強力な支援者、バックボーンになってくれる人を探すこと。」

この助言の背景には様々な意図があるが、そのなかでもシビアな問題としては、精神障がい者が住まう場という存在が、今の日本の地域社会ではなかなか快く受け入れられないという厳しい現実があるという点。だからこそ地域住民のなかで理解者と関係性を築き、受け入れてもらえる地道な努力こそが、物件取得以前に必須なアクションである。ましてや、まったく縁のない地域での活動ということであれば、なおのこと慎重さを求められるであろう。

続いて小山さんはこう尋ねられた。

「なぜ浅香山病院の近くで考えないのか？」

その可能性があることは小川氏ら看護師たちも初めからわかっていた。にもかかわらず、見てみぬふりをしてきたのだ。小山氏訪問の直後に、小川氏が記した当時の会議メモを振り返る。

病院の近くは嫌だった。

長期入院者であるメンバーにとっては、病院が「地域」になっているのかもしれない。でも、そのことを受け入れることは「そこしか知らない(知り得ない)、そこしか選択できない」という事実を受け入れることになってしまう。と同時に、病院の近くでは、私たち(看護師)が・・・ワクワクできない。それは病院の影響力を期待して、病院の傘下で活動していると地域の方々から思われるのが嫌だからだと思う。病院とは連携しつつも、そこではできない新たな実践の可能性を探りたいだけにそう思われながら活動をするのは辛い。

小山さんには「病院の近くは古い文化住宅が多く、これだと思える物件がないと考えている」と答えてしまった。そう思っているのは嘘ではないが、本質ではなかった。本当はわかっていたのに、あの場では答えられなかった。

(資料「2015・8・6 臨時会議の結果」より、ニュアンスをとどめつつ一部筆者が改稿して引用)

## 共感と協働から「場」がつくられてゆく

ここから、十数回に及ぶ浅香山病院近隣地域のリサーチが始まった。南海高野線浅香山駅の近くにある香ヶ丘商店街の立地の良さや、徒歩県内で生活行動が完結できる利点なども改めて確認できた。しかし何にもまして大切だったのはこの地域で志を持って活動をしているキーパーソンとの出会いだった。

具体的には、亀井哲夫さんを始めとした「雑魚寝館」の方々との出会いだ。雑魚寝館とは、住居の一部を淡水魚専門のミュージアム兼カフェとして運営しているスペースで、淡水魚をモチーフにしたアート作品の鑑賞や鰻をふんだんにつけた様々なメニューも楽しめる場所として知られている。また、こういった取り組みを通じた浅香山界隈のまちづくりにも積極的に取り組んでいる。小川氏らの思いに賛同してくれた亀井氏たちから、次は関西大学堺キャンパスの人間健康学部教員の安田忠典氏や彼の学生たちとの出会いへと繋がってゆく。これらの出会いが「腹を決める」大きなきっかけとなった。





Shop

TEL 33-3514

お好み焼・たこ焼 たっちゃん









2015年11月。浅香山病院に程近い、南海高野線浅香山駅前の香ヶ丘商店街の築50年の物件2棟を賃借。会議を重ねた結果、まずは「家」の前にメンバーと地域住民が交流できる「コミュニティカフェ」の運営から始め、そこから地域での信頼関係を強固なものにしてから元来目標にしてきたハウス構想を実現させよう、という結論となったのだ。

地元の大工さんの指導のもとまずは天井のペンキ塗り。そして、クロス張り、床張り、入口の戸がないので玄関をつくる、和室やトイレの改修などなど。メンバーも病院から駆けつけ汗を流し、関大安田ゼミの学生たちにも協力いただき、セルフビルドを通じて日に日に場が生まれ変わっていった。

そして場づくりはカフェ開設のみならず、その運営主体となるNPO法人設立の動きへと加速してゆく。事業理念や目的、そしてその第一弾の手法であるコミュニティカフェの運営。諸々の方向性が定まってゆくにつれて、自ずと法人格の種類もNPO法人に落ち着いた。堺市市民協働課の相談コーナーを数度活用し、定款を整え、看護師仲間やつながりの生まれた地域住民に、会員への参加を呼びかける。

そして2015年11月19日19時。堺市浅香山小学校内にある浅香山公民館にて、NPO法人kokoimaの設立総会を開催した。入会会員総数57名（正会員41名、賛助会員9名、サポーター会員7名）、うち総会への出席会員数41名。筆者も理事就任を兼ねて出席。地域に愛される公民館で多くの人たちに見守られるなか、いいスタートを切った。

【表現実践から生まれた新たなケアの実践  
の言語化 —今後の研究の展開と課題—】

精神科病棟に長期入院している患者さんが主体的に取り組む写真展、そこから「患者／看護師」、「ケアされる／する」という関係を超えてともに写真展運営にとりくむ「メンバー」へと変化していくなか、浅香山病院内でのコミュニティサロンやそこでの表現ワークショップ、そして地域生活の足がかりとしてのコミュニティカフェの開設へ。このプロセスには、治療や看護といった医療という枠組みのなかで培われて来た経験や専門性と、同時にその専門性や分野の常識のなかでいつしか埋もれてしまった「お互いがひとりの人として関係し合う」というコミュニケーションの現れが、時に手を結び、時に拮抗しながら融合してゆく有り様が浮かび上がって来る。



そして、本研究ではこれら 一連のプロセスのきっかけがなぜ「写真展」という表現的実践だったのか、そのことをより精緻にあぶりだしていくことが重要な課題と考えている。そのために発表者は2016年4月から Cafeここいまにて月一で「kokoima 暮らしと表現の私塾」という、メンバー対象の表現ワークショップを自ら実施し、そこでは文学や音楽や映画などをきっかけに、「(地域)社会のなかで生きること」について言葉になりきれない言葉をみんなで紡いでゆくことを大切にしている。これは無論、「治療」でも「看護」でもないが、しかし、他者が生きることに関与し、お互いが影響を受け合ってより良い生へと導き合う試みを広い意味での「ケア」と名付けることができるのであれば、この 表現的実践ならではのケア観の変遷を、引続きkokoima関係者との協働と対話を通じて言語化してゆくことがまず必要であろうと、考えている。

その一方で、本日の報告では、現場実践者の小川貞子との共同発表という体裁をとることで、「実際のところ現場では、アサダの報告以後もかなりの変化が存在し、かつその変化は、“表現による支援観の変化”という枠組みを“きっかけ”にはしつつ、地域で“場が開かれていくプロセス”においては、地域住民・地域コミュニティとの関わりの中で編み直されてゆく支援観の変遷という要素の方が強くなってきていることも重ねて示しつつ、小川からの報告へと引き継ぐこととする。

よって、研究という視点から言えば、そもそも表現活動から及ばされる影響をどこまでの射程で捉えるかなどは、kokoimaの事例のみに絞らず、同時にフィールドワークを継続している他の障害福祉（滋賀県近江八幡市の社会福祉法人グロー、静岡県浜松市の認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ等）の実践から得た知見も掛け合わせながら、これらのアクションリサーチの理論化に向けた動きを、模索していきたい。